

《最優秀賞》

「町の憩いの場所で」

南小阪合町 角谷 まさ子

大阪府は新型コロナウイルスの感染拡大の為、緊急事態宣言の再延長を発表した。

友人たちとの食事はおろか、サークル活動は全て中止となり、外出自粛をやむなく自宅で過ごす日が続いた。

「今日は雨が降るかしら？」

「晩ごはん何がいいかしら？」

こんな何気ない会話をする相手もいなくなった生活が長い。

「何もしないでじっとしていたらあかんよ」

体の中から『活』^{かっ}と、気合をいれる声が聞こえ、『百歳まで歩こう』のキャッチフレーズが頭をかすめた。

住宅街の花を眺めながら、市民の憩いの場として親しまれている玉串川沿いに出た。

桜の季節は終わり若葉から青葉のトンネルは夏が近いと感じた。

散歩中の友人とすれ違い久し振りの顔に「元気？」と声を

掛け合った。

川の岸は低い石段になって下に降りると水に手が届きそう。先日の雨で少し濁っているのか、群れになった鯉の口だけがパクパクと見えた。「凄い」思わず声が出た。

鯉と遊べる川沿いとして人気があり、子供連れの姿を見かけるが、今日は珍しく誰もいない。足元には重なりあつて寄ってくる凄い数の鯉。餌を求められている気がした。

鯉ってこんなに大きな口なんやー。お腹の中まで見えそうだ。

向こうから自転車に乗った女性が立ち止まり、パクパクしている鯉の口を見て「あら、お腹が空いているの？」と、足もとの鯉に「そうかそうか、お腹空いていたのか」と話しかけて、カバンの中からパンを取り出し、「ほら、奥さんも一緒にあげよう」とパンを手渡してくれた。このあつたかい不思議な連帯感。

二人でパンをちぎって、ポイツ、ポイツと投げると、群れになっている鯉はバシヤ、バシヤと凄まじい音を立て、ジャンプしてパクリ、パクリとパンを奪い合った。

群れから外れた鯉にもホラッ、鯉はパクリと一気にくわえて丸い目でウインクしたように見え、「ワー凄い」いつの間

にか童心に帰っていた。

「ハイ、もう終わりよ」女性は空っぽになった袋を鯉に見せて、石段を上がって行った。

一服の清涼剤をくれた女性に「楽しませてくれてありがとう」とお礼を言おうと、「こちらも楽しかったわ。会社の帰りなの」と笑顔で答え、再び自転車で行った。

コロナ自粛の中、思わぬ楽しい時間をもらった人との縁。

川の向こうには白鷺が餌をついばみ、自然がいっぱいこの町には人々を癒してくれる場所があり、市民が集い、豊かな時間を過ごしていた。

コロナ。早くなくなつて。